

令和3年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	京都芸術大学舞台芸術研究センター	
施 設 名	京都芸術劇場	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・人材養成事業	
内 定 額 (総 額)	19,745	(千円)
	公 演 事 業	17,470 (千円)
	人 材 養 成 事 業	2,275 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	0 (千円)

(1) 令和3年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	村川拓也新作『事件』	2021年5月14～16日	出演：有間七海 北川航平 島田幹 大 陌間彩花 早川聡 山田幸音	目標値	350
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	210
2	京舞と狂言 vol.2	2021年7月18日	演目：京舞『浦島』、狂言『神鳴、京舞狂言共演新作『たぬき』 出演：茂山忠三郎、井上安寿子 他	目標値	460
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	271
3	川村毅作・演出『4』	2021年8月28・29日	出演：今井朋彦、加藤虎ノ介、川口覚、池岡亮介、小林隆	目標値	290
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	233
4	KUNIO10『更地』	2021年10月9・10日	作：太田省吾 演出・美術：杉原邦生 (KUNIO) 出演：南沢奈央 濱田龍臣	目標値	650
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	328
5	KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2021 AUTUMN フィリップ・ケーヌ 『ファーム・ファタル (Farm Fatale)』	2021年10月16・17日	演出：フィリップ・ケーヌ 共同演出：contact Gonzo 出演：松見拓也、三ヶ尻敬悟、塚原悠也 (以上、contact Gonzo)、伊藤彩里 (gallop)、長峯巧弥	目標値	480
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	376
6	春秋座 能と狂言	2022年2月6日	演目：能「弱法師」、狂言「武悪」、追悼トーク「渡邊守章先生と『春秋座—能と狂言』」	目標値	480
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	481
7	春秋座マイ・ファースト・オペラ『フィガロの結婚』	2021年7月10・11日 (中止)	新型コロナウイルス感染症の影響により中止。	目標値	950
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	—※

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(2) 令和3年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	舞台創作のプロセスを知る演劇ワークショップ公演(仮題)	2022年3月26・27日	『川を渡る』 構成・演出：藤田貴大 出演：長谷川七虹、服部天音、濱田優希、森史佳、保井岳太、渡邊菜央	目標値	400名 (180名 *2回、参加者40名)
		オンラインおよび京都芸術劇場 春秋座舞台上		実績値	142

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>令和 3 年度の公演事業はすべて大学開学 30 周年、劇場開場 20 周年記念として実施された。感染症対策のため、公演事業が 1 件（事業 7）は中止、海外からの招聘アーティストによる公演事業 1 件（事業 5）は内容を大胆に変更して実施したが、それ以外は大学の模範とされた感染症対策を徹底した上で、予定どおり実施した。</p> <p>【本劇場のミッション、地域の特性】</p> <p>本劇場は京都芸術大学が所有する【大学の劇場】であり、平成 13 年の開場以来、「芸術立国」「京都文芸復興」を標榜している。その建学の精神に立脚し、①教育（大学と連携した実践的人材育成）、②研究（芸術大学にふさわしい舞台芸術の創造と研究）、③社会貢献（舞台芸術を通じての地域文化の活性化）という 3 つの使命のもとに運営されており、管理・運営は学内附置研究機関である本舞台芸術研究センターが担っている。</p> <p>【ミッションにもとづいた事業の組み立て】</p> <p>本年度の事業は、上記ミッションのもと、例年どおり、本学の舞台芸術学科・大学院の教員、学外の演出家、舞踊家、地域の民間劇場の芸術監督、国内外のアーティストの支援団体役員等の多様な分野の識者で構成される運営会議の議を経て企画された。事業の組み立てにあたっては、これまでも「伝統」から「現代」まで多彩なプログラムを組むことを基本とし、今年度は本学卒業生を中心とした地域の若手から我が国を代表する人間国宝まで、幅広い年齢層や地域のアーティストが集うラインナップとなるよう、バランスも重視した。</p> <p>前年度に続き、一部、感染症対策の影響があったが、全体として【大学の劇場】にふさわしい質の高い舞台芸術作品の創造を実現することができた。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>新型コロナウイルス予防のため中止された〔事業 7〕以外については、以下のような意義が継続して認められた。</p> <p>〔事業 1〕は、前年度の劇場実験を経て 2 年がかりで上演したもので、演出の村川拓也をはじめ、出演者やスタッフに関西の舞台芸術界で中堅として活動している本学の卒業生が多数参加した。同戯曲は高い評価を得、令和 3 年の第 21 回 AAF 戯曲賞特別賞（公益財団法人愛知県文化振興事業団）を受賞した【文化的、社会的意義】。〔事業 2〕は、京都における伝統芸能の若き継承者である京舞井上流の井上安寿子・狂言大蔵流の茂山忠三郎という異分野の組み合わせ。監修には本学の田口章子教授（歌舞伎研究）があたったが、企画・戯曲・演出は井上・茂山の両人が中心になって見ごたえある舞台を立ち上げ、〈現代に生きる伝統芸能〉として京都新聞などメディアでも話題になった【文化的、社会的意義】。〔事業 3〕は鶴屋南北賞、芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した話題作の再演で、作者である川村毅の初演出作品。死刑制度にかかわる 4 人の人間の深層がモノローグによってみごとに描かれた。【文化的、社会的意義】。〔事業 4〕は、故太田省吾作を太田の教え子でもある杉原邦生の演出。太田の作を未来に希望をみる夫婦の物語として再生させた【文化的、社会的意義】。〔事業 5〕は、2016 年初演のフィリップ・ケーン『もぐらたち』の一部を Contact Gonzo のライブで上演し、それに 2018 年のケーン作『Crash Park』の映像を接続する形で上演された。来日が不可能になったことによる窮余の策だったが、人間の愚かさを描いた「新作」の誕生となった【文化的、社会的、経済的意義】。〔事業 6〕はすっかり定着した「劇場能」、演目は長年同企画を監修してきた故渡邊守章ゆかりの『弱法師』で、上演後の追悼トークは、1980 年代以降の「越境する能楽」のよき回顧ともなった。以上、【大学の劇場】での企画であることから経済的な意義は希薄だが、いずれも京都という地域の特色を生かした、若い舞台関係者を育成する場でもあったと自負している。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

公演事業、人材養成事業では、以下の目標を掲げ、その目標を以下のように達成した。

【学生や若年層の社会包摂にむけて】

本学が進める、芸術を通じた学生と社会との連携を強化する「社会包摂」活動の一環として、【大学の劇場】である本劇場では、舞台芸術の魅力や醍醐味を、学生をはじめとする若年層にアピールを行った。

まず、学生ユースチケットおよび本学学園生のチケット購入者率は、年度の目標として掲げた 13%を上回り 15%を達成した。また、本学学生にむけた PR として、メール配信登録により、本学学園生割引価格を利用できる制度を平成 29 年度より導入しているが、令和 3 年度は前年度比 111 名の増となり、チケット購入者増につなげることができた。さらに、人材養成事業では、これまでも、地域住民とアーティスト、本学の学生・卒業生が協働して作品創作を行うことで、地域文化の振興を図り舞台芸術に関わる人材を養成する企画を継続的に実施してきたが、令和 3 年度は、若手演劇作家・藤田貴大が作、演出を担当し、小学生以上の幅広い年齢層の地域の一般参加者と京都芸術大学の学生による演劇ワークショップを実施した。同公演には、本学学生 8 名、一般 25 名が参加し、文化芸術活動を通じた地域とのつながりや、世代や立場を超えた人と人とのつながりの形成につなげた。

【オンラインを活用した文化芸術の発信強化】

感染症対策の影響で劇場へ足が遠のいている方々にも、オンラインを通じた文化芸術の発信を行うこと、そして感染症対策下のあらたな創作ツールのひとつとして、オンラインの積極的な活用を目指した。

〔公演事業 2〕では、出演者（茂山忠三郎・井上安寿子）の二人によるそれぞれのワークショップ動画や 2019 年度に実施した同シリーズ vol.1 の動画を、二人の解説とともに Youtube にて配信した。

〔公演事業 6〕では、企画で当センター前所長である渡邊守章の逝去をうけて、追悼番組を配信。過去の同シリーズの舞台映像 2 本を、演者のインタビューとともにオンラインにて配信した。

また、〔公演事業 5〕、〔人材養成事業 1〕では、行動制限がとられる中、遠隔地にいる演出家とのクリエイションのため、オンラインでの創作、ワークショップを実施した。

【広範な事業の周知】

地域の劇場として、その活動内容をより広い層へ届けるため、各事業の周知につとめ、また、劇場サポーターである劇場友の会会員や、劇場のステークホルダーである本学関係者（同窓会・保護者会）の会員組織への PR 徹底に努めた。また、人材養成事業では、児童・福祉・コミュニティ施設などへの広報を強化した。

友の会会員数は目標値より 233 名少なかった。しかしながら、感染症の影響がでる前の平成 31 年度と比較すると、令和 2 年度・令和 3 年度はさほど大きく友の会会員数は変化していない。これは年次更新を続ける会員が一定数いること、公演ごとの入会ではなく、本劇場全体に対する支持者が多いことを物語っている。また、本年度の本学関係者の来場者数は、卒業生が活躍する公演を多数上演したこともあり、目標を 16 名上回った。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

【公演事業】

今年度も事業期間は、これまでの経験に鑑みて1日から3日の公演となった。入場者数では目標に達しなかった公演もすくなくないが、各公演への評価は「2, 自己評価」の「(1)妥当性」に記したように、いずれも高いものだった。当初の計画から大きく変更した〔事業5〕が、はからずもフィリップ・ケーヌ作品の特色を明確にする結果になったのは、まさに「奇禍」というべき出来事で、舞台芸術史上に記憶されてよいことと思う。また、公演事業の時期については、地域の劇場として、来場者にとって定期的に公演が開催されていることが理想という考えのもと、年度を通し特定の時期に偏らないよう留意して、スケジュールリングを行った。なお、〔公演事業2、3〕は、前年度に感染症対策のため中止した公演を本年度にあらためてプログラムしたものであり、〔公演事業7〕は、稽古期間が緊急事態宣言発令期間と重なり、稽古を安全な環境で実施できないと判断して公演自体を中止とした。それ以外は、〔公演事業5〕のような例もあったが、計画通りに実施することができた。

【人材養成事業】

〔人材養成事業1〕の演劇ワークショップ公演では、当初5月から12月にかけて実地でのワークショップおよびフィールドワークを行う予定だったが、感染症対策のため、ワークショップの開始を8月に後ろ倒しし、オンラインと実地の併用にて事業を進めた。また、その成果発表である公演およびその直前の稽古は、カンパニー側の感染症対策の影響によるスケジュール調整により、それぞれ1週間ずつ後ろ倒しになったが、当初の計画通りの日数は確保され、地域の方々と、アーティスト、本学学生や卒業生の協働作業は想定通り進めることができた。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

【公演事業】

〔公演事業5〕では、新型コロナウイルス感染症拡大により、ヨーロッパから来日予定だったアーティスト・出演者・スタッフの入国が困難になったことから、アーティストの創作手法や世界観を伝えつつも、アーティストがオンラインで演出し、日本人出演者・スタッフで上演可能なプログラムに変更した。これにより、出演者やスタッフ数の変更や、海外からの渡航費が発生しないこととなり、事業費は当初の計画からは大幅に支出が下がった。しかし、事業費は大幅な変更があったが、当初の趣旨・目的であった、演劇というメディアで現代の諸問題へのアプローチをおこなう演出家(フィリップ・ケーヌ)の手法を、地域の観客に紹介することができ、アウトプットにおいては当初の計画どおりの効果を得ることができた。

【人材養成事業】

〔人材養成事業1〕の演劇ワークショップ公演では、上記にも触れたとおり、感染症対策によりワークショップの大半をオンラインに変更し、フィールドワークも規模を縮小したことから、事業費は大きく縮小された。また、ワークショップもオンラインに変更したことで、関東在住の演出家と、関西在住の出演者・スタッフとで、インタビューワークショップというあらたな手段を取ることが可能となって、感染症対策下でのあらたなクリエイション方法を編み出すことができ、アウトプットも当初の予定どおりの成果を残すことができた。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

【劇場運営組織】

本劇場を企画・運営する舞台芸術研究センターは、平成13年度の劇場開場より、主任研究員（※）として本学舞台芸術学科・大学院をはじめとする学内教員や、学外の演出家、実演家、研究者やアートマネジメントのプロフェッショナルから構成し、自主事業の選定や運営の方針を決定してきた。また、現場レベルでも、制作は、関西を中心に舞台制作や芸術支援団体での勤務経験者、本学舞台芸術学科卒業生やフェスティバル制作経験者などが集まり、技術面では、関西の現代演劇を代表するカンパニー『維新派』の舞台監督を長年つとめたスタッフが技術監督を務めており、【大学の劇場】に相応しい、教育・研究・社会貢献の3つの柱にそった、伝統芸能から海外アーティストによる上演、先端表現をもちいる実験的な取組まで多彩なプログラムを実現させている。また、事業ごとに連携する他劇場やフェスティバル、カンパニーとの協働作業により、日々、ノウハウを蓄積している。

（※）主任研究員制度は令和4年度に制度を改め、あらたにプログラム選定、企画運営改善、研究教育連携強化を目的とした委員会制度に改編される予定である。

【劇場の資源】

本劇場の最大の資源は、現在広いジャンルで活躍をしている本学卒業生や、本学教員にあると言える。

〔公演事業1〕では、「ドキュメンタリー演劇」とよばれる手法を用い、国内外で高い評価をえる本学卒業生の村川拓也による新作を上演した。出演・照明・映像・制作スタッフに、本学を卒業し主に関西で活動をする中堅スタッフが本事業に多数参加した。また、出演者には3名の在校生と2名の卒業生と1名の一般参加者が出演し、在校生を含めた若手養成事業としての機能も果たした。

〔公演事業2〕は、本学卒業生で、伝統芸能の継承者である京舞の井上安寿子、狂言の茂山忠三郎を中心にしたプログラムで、出演だけでなく、企画の段階から積極的に関与し、初の京舞・狂言の共同作業による新作創作がおこなわれた。伝統芸能の若い担い手や地域の観客にとって、伝統芸能の力と今後の可能性を感じさせる公演となった。

〔公演事業3〕は、本学の舞台芸術学科長をつとめた川村毅作・演出作品の上演だが、本作の上演は、平成30年度の〈モノローグ〉、平成31年度の〈映像を用いた演出〉をテーマにした公開研究会における検討を踏まえて上演されたもので、このような長期にわたる息の長い準備を経たうえでの上演は、上演までのプロセスを重視し、創造と研究の融合を標榜する文部科学省共同利用・共同研究拠点の理念の実践であり、それはまた【大学の劇場】を運営する本研究センターの理念とも重なる制作のかたちでもある。

〔公演事業4〕は、本学卒業生で演出家として全国的に活躍している杉原邦生の演出作品である。『更地』は杉原が本学在学時の映像・舞台芸術学科の学科長だった太田省吾の作であり、自らの演劇の原点でもある太田省吾に向き合う試みでもあった。杉原は平成24年に『更地』の演出を手掛けているが、このたびの舞台は「創造」と「研究」の連携を標榜する本劇場にふさわしく、新しい『更地』の発見という成果となった。

このほか、〔公演事業5〕における状況に応じた適切な対応、〔公演事業6〕における伝統芸能の正統的な上演、〔人材養成事業1〕での、本学卒業生による出演・スタッフの活躍など、いずれの事業も本劇場の機構やスタッフ構成をよく生かすことができた事業であった。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

【メディアの反応】

主催事業はいずれも京都・関西の新聞等メディアを中心に、全国のメディアにむけた情報発信をおこなっている。今回は、特に、本劇場での自主制作事業である、〔公演事業1, 2〕において、時間を十分にとった記者発表を実施し、各社からの取材がなされた。

〔公演事業1〕は、日本経済新聞、京都新聞から稽古期間中に演出の村川拓也へのロングインタビューの依頼があり、前年度に実施した本劇場での試演の際の舞台写真や演出家の写真とともに、過去に上演された村川作品の紹介や新作の創作手法、新作への期待をにじませる記事が大きく紹介された。

〔公演事業2〕、京都を拠点に活躍する若き伝統芸能の担い手2人による公演ということで、地元メディアの期待も高く、本公演の記者会見には、新聞メディアを中心に12名の記者が参加した。また、京舞と狂言の異ジャンルによる合作の新作公演ということもあり、記者会見以外にも、稽古場での取材が実施され、ふたりのインタビューとともに、それぞれの技法をもちよりながら創作される様子が紙面に大きく掲載された。公演紹介記事は15の媒体に掲載された。

上記2つの公演は、いずれも京都を拠点に活躍をするアーティストを中心とした公演で、本劇場単独の上演であったが、メディアの発信は、京都・関西にとどまらず広く全国におよび、また、『事件』が受賞した戯曲賞は、地域を限定していない歴史ある戯曲賞である。この受賞は京都における舞台芸術の質の高さ、舞台芸術の広いジャンルにおいて才能豊かな人材がこの地域で活躍していることを、あらためて認識する機会となったが、同時に、今後の地域の舞台芸術ひいては文化の振興や発展につながるものとして意義ある出来事だった。

【受賞】

〔公演事業1〕の村川拓也による戯曲『事件』が、2021年第21回AAF戯曲賞特別賞（公益財団法人愛知県文化振興事業団）を受賞した。

【地域との連携】

〔公演事業5〕は、Kyoto Experiment 京都国際舞台芸術祭実行委員会との共催として実施した。令和2年度は海外招聘アーティストの上演はすべて上映会に変更したが、今回はコロナ禍のなかで可能な上演形態を模索し、過去、フィリップ・ケーヌと協働創作した実績をもつコンタクトゴンゾの全面的な協力をえて、日仏アーティストがこれまで築き上げてきた信頼関係の上に立って、オンラインでの国際共同演出が実現し、その結果、コンタクトゴンゾをはじめとする関西・京都圏のアーティストとフィリップ・ケーヌによる協働作業という、貴重な機会をもつことができ、さらに平成22年度より続く京都という地域発の国際フェスティバルのさらなる発展の契機ともなった、なお、令和2年度に続き、令和3年度も京都国際芸術祭実行委員長は当センター所長の天野文雄が担った。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

本劇場の活動は、以下のように各事業を通じて持続的に発展するものと認められる。

【法人が定める中期計画に沿った劇場運営と人事評価】

本劇場を運営する舞台芸術研究センターは、先に述べたとおり学校法人瓜生山学園の附置研究機関であり、法人が定める中長期計画に沿った運営目標が設定されている。令和3年度は、平成29年度に策定された5カ年計画「次代の芸術教育をリードする学園改革－社会実装による教育力強化－(VISION2021)」の最終年度として、法人全体で社会情勢の変化に対応しながら、芸術教育の社会実装化の強化を目指した。本舞台芸術研究センターにおいても、法人が掲げる5カ年計画にそった「事業計画(アクションプラン)」を定め、本劇場がミッションとして掲げる教育・研究・社会貢献の3つの柱を確実に果たしていくことを目標とした。

年度ごとに設定された「事業計画」は、所属する教職員の個人目標に落とし込まれ、法人部門を中心に、学園中期計画の達成目標および進捗状況が客観的に点検される。劇場運営にかかわる本舞台芸術研究センター職員も同様に、自己点検評価・認証評価により目標達成への進捗確認がすすめられ、人事評価に反映されている。「事業計画」およびそれを反映した個人目標の設定・評価によって、PDCAサイクルの実質化・高度化が図られた。

【本劇場の運営体制について】

本劇場の運営には、経営母体である学校法人瓜生山学園京都芸術大学の教職員のほか、業務委託・臨時職員等のスタッフがあたり、劇場管理とチケット・友の会業務には業務提携した外部の業者があたっている。教職員以外のスタッフにも「事業計画」は共有され、部署全体の目標課題として取り組んできた。

なお、劇場職員の平均継続年数は、本学職員9.6年(3名)、委託職員8.5年(13名)、臨時職員2.8年(5名)で、定着率も高い。本年度もこのような体制のもと、機能支援事業についても安定的な運営を行うことができた。

【学生の参加、ネットワークの構築】

本劇場の運営には、【大学の劇場】として本学舞台芸術学科をはじめとする本学学生が、フロントスタッフやステージスタッフとして参画している。研修をうけたフロントスタッフ、ステージスタッフは現時点で274名おり、公演ごとに10~20名程度が企画・制作・運営などに関わってきた。また、本年度も、京都国際舞台芸術祭をはじめとする地域のネットワークや、関東を拠点とする演劇団体(能の「鍊仙会」や、狂言の「万作の会」、「KUNIO」や「Tファクトリー」等のカンパニー)など劇場開設以来培ってきたネットワークを生かすことができた。